

子どもの家庭用学習機について

— 和歌山大学学生を事例として —

The Children's Desks for Home Study
— In the Case of Wakayama University Students —

梅原清子(家政教室)

Kiyoko UMEHARA

子どもの住生活研究にあたり、家庭で保有される学習機という生活財の存在に着目し、和歌山大学の小学生時代の学習機を事例として、その保有および使用実態を調査した。

学習機は、100%に近い保有率で、子どもの小学校入学を機に親や祖父母によって買ってもらえる。その際、子どもはキャラクターや流行のタイプを期待するが、大人のほうは実用性を重視しがちである。学習機の使用の実態は、子どもの個性や男女により差異があるが、物珍しい当初は別として、中学生程度までは学習のための使用頻度は低いこと、持物の置き場・収納場としての機能は大きいこと、整理整頓などの自己管理は不十分であること、大学生の今日まで処分されず使用し続けていること、自己の拠点であり続けた学習機への愛着あるいは愛惜の念が強いこと、などの傾向がとらえられた。

キーワード：学習機の保有、入手と処分、使い方、自己管理、生活拠点

1. 研究目的

冬から春先のシーズンになると、家具店の店頭には一斉に学習機が陳列され、親子連れの買い物客の姿が見かけられる。最近は無垢材を使った豪華なものも多く、ひとところのような機能性一点張りではない、高級家具のイメージに近付いているように感じられる。子ども用とはいえ、価格もかなりのものである。いつの頃からだろうか、子どもが小学校に入ると専用の学習機を与える慣習になったのは。新入児をもった親は相当の出費とスペースをやりくりして(でも嬉しそうに)学習機を子どものために用意する。これに対して、子ども自身は学習機をどう受けとめているのだろうか。学習機に関しては、体位への適合の分析¹⁾や、家庭科教育的視点から意識調査したもの²⁾などがあるが、子どもの使用実態を明らかにしたものは少ないようである。また、子ども部屋についてはこれまで、子どもの発達や家族関係などと関連させて多くの研究³⁾がなされているが、仙田が言うよう⁴⁾に、子ども、とくに小学生時代の子どもにとっては、部屋以上に学習機の方が重要なのではあるまいか。そこで今回、子ども(小学生)の学習機の実態をとらえ、その使い方や寄せる思いを子どもの側から調べることによって、学習機の意義を考えようとした。

2. 研究方法および調査対象

本学部「生活・生活科教育法」の講義中に、受講生に小レポートを書いてもらう。テーマは「小学生の頃の私の机」である。B6判サラ紙を渡し所要時間15分程度を設定して、思い付くまま自由に記述させた。調査日は1991年12月2日。（本科目受講生を対象としたのは、彼らに学習機を通して自身の生活をしらせさせ、生活科の教材研究につなげたい、という意図を含んでいた。）当日の出席者のうち77人分を有効とした。その内訳は、男子47人、女子30人、また全員が2年生である。したがって、小学校に就学したのは1970年代後半ということになる。

3. 分析方法

レポートの記述内容から、学習機の入手方法（いつ頃どのように）、意匠（形態や材質）、使い方（机でしていたこと）、管理（とくに整理整頓）、処分（保有期間、現在の行方）について分類し、抽出を行った。なおこれらの項目については、出題のとき、例として口頭で示しておいた。また分類と抽出にあたっては、直截的に文字で表現されてなくとも、文脈上明白なものも含めている。さらに自由記述という調査の性格上、抽出人数以外に該当するケースもまだ存在するであろうことを付け加えておきたい。

4. 結果と考察

各項目の抽出人数一覧を表1に提示しておく。

(1) 学習機の入手方法

1人を例外として残る76人全てが、小学生時代から学習機を保有していた。電気冷蔵庫、洗濯機の普及率は既に98%に達しているものの、食堂セットや乗用車が50%、ルームエアコンや電子レンジは20%台の頃である。（経済企画庁「消費動向調査」による）子どもの学習機は必需品としてこの時期すでに広く普及していたと言ってよい。

学習機を買ってもらったのは、やはり「小学校入学を機に」が集中しており（40人）、うち半数（18人）が入学祝いとして祖父母からプレゼントされたものである。「新入学」は現代の子どもたちにとって最初にして最大の通過儀礼であるにちがいない。この晴れがましい、社会への門出を祝う家族の気持ちが学習機に反映されているようである。その他として、入学以前から与えられた例は4人みられ、一つ違いの兄弟が入学したときに一緒に買ってもらったり、「自分の机で学習していくのに慣れるためにと、両親が考えてのこと」（K. 女）だったりである。逆に「どうせ机でやらない、という考えで」（H. 男）小学校2年生になってから与えられたというのも1人いた。

学習機の入手ルートは、デパートや家具店での新規購入が大半で、58人が記している。この購入の時の選択基準は、後でも述べるが「親のセンスで」「半強制的に」決められ、子どもの要求よりは親または大人の主導であることが多かったようである（16人）。また

13人と少数派であるが、古い机を譲られるなどした者もいる。その内訳は、父母の使用していた机6人、兄姉からのお下がり3人、近所・親戚から3人、祖父の手作り1人、となっている。兄姉からが意外と少ないのは、上下の年齢は近接するのに机の使用期間が長いためであろう。

さて、自分の机を与えられた子どもの多くは大得意である。「うれしくて、うれしくて、それよりも先にかつてもらっていたランドセルを背負って机のまわりを走り回った。」

(T. 男)とまさに狂喜乱舞する様や「すごくうれしくて、妹に自慢し、しばらくの間は、イスに座らせてもあげませんでした。」(M. 女)という子どもらしい様が生き生きと伝わってくる。これは新品の机に限らず、お下がり組でも同様である。「その机が嫌だとは全く思わなかったし、新しいのが欲しいとも思わなかった。むしろ自分の机を持てたこと自体、うれしくて仕方がなかった。」(M. 女)「兄のお古でも、自分の机があるというのは、とても感動的で嬉しかったです。」(F. 男、傍点は著者・以下同じ)と述べている。もっとも、喜ぶ子ども(23人)より概して少数とはいえ、「あまりなじめず」「期待はずれで」「友達の机がうらやましくて」浮かない気分のものも全体で14人見られた。

ここで、机を保有しなかった唯一の例について見ておくと、彼の家族は一つの部屋に集

表1 抽出人数一覧

単位は人数

入 手 方 法	入学時購入	40 (うち入学祝い18)	
	新規購入	58	
	中古など	13	
意 匠 ・ 形 態 ・ 材 質	本棚付学習机	34	
	平机	5	
	ライティングビューロー	1	
	スチール製	16	
	木製	15	
	木目調	7	
入 手 時 の 気 持 ち	嬉しかった	23 (うち男子 9 女子14)	
	期待はずれ	14 (9 5)	
使 い 方	使っていたほう	39 (17 22)
	使わなかったほう	18 (14 4)
整 理 整 頓	散らかっていた	26 (15 11)
	物を置くだけ	7 (5 2)
	きちんとしていた	11 (7 4)
	よく使っていた	7 (1 6)
処 分	残っている	38	現役で使用 23
			物を置くだけ 5
			実家にある 10
	処分した	16	高卒まで使用 5
			時期不明 3
		買い替えなど 8	

注 学習機を保有した76人(男子46人・女子30人)中である。

まって食卓で各自の仕事をする住習慣であったこと、そのため「家族の絆が強く、どうしてもそのおぜんから離れることができず、今でもそこで大学の勉強をやっています。まるで戦後のような話ですが、この方が私の人間形成にとってもよかったような気がします。」(O. 男)と肯定的なとらえ方をしていることがわかる。

(2) 学習機の意匠

ここで、彼らの手にした学習機の形や材質についてのアウトラインをつかんでみよう。1960年代中盤から、学習家具メーカーは相次いで学習機の製造を開始している。当然ながら各メーカーの開発コンセプトなり消費者ニーズなりがあり、流行があり、学習機の意匠も多様化してくる。例えば、K社の75年の製品カタログでは、正面に棚と蛍光灯が付属し、コンセント、カレンダー、時間割表、温度計さらに電動鉛筆削り、時計など様々なアクセサリがセットまたはオプションされた、スチール製の机をみることができる。和大生の場合、シンプルな平机と思われる、彼らの言い方では「職員室にあるような」「ただの机」であるのは5人と僅かで、それも親から譲り受けたというような場合である。圧倒的に多い、「ごく普通の学習机」とか「一般に小学生向きのもの」とか「よくあるタイプ」とかいうのは少なくとも棚付きの、学習機のことである。後者の机には子どもの気を引くちょっとした仕掛けがあって、「正面のところにバンビの絵があって、そこには磁石でメモが止められたのですごくうれしかったのを覚えています。」(M. 女)「デスクライトは2個もついていて、(中略)私は、喜んで『プチッ』とヒモを何度も引っ張って、明かりをつけたり消したりしたものです。」(A. 女)という具合である。また、天板が「白でピンクの小花がちらばっていて、その部分がお気に入り」(A. 女)や「スタンドが前に出ること、いすが回ること、引き出しにカギがついていることがすごくうれしかった。」(T. 女)というものもある。こう見ると、女子の方が机の細部についてこだわりが強い(または記憶し表現しやすい)と言えなくもない。しかし次の例に見るように、他の人から譲られた中古の机の場合でも、親のささやかな心遣いで充分満足をすることもできる。「こんなふうに(絵略)折れ曲がるスタンドと、机の上にひくマット(たしかキキララの絵がはさんであった)を買ってもらい、木製の本立を父に作ってもらったことをよく覚えている。決して、きれいでかっこいい机ではなかったけど、それだけそろえば、私は兄の新しい机よりも満足していたように思う。」(H. 女)

材質については、「私が新1年生になるころは、ほとんどがスチールの机で、今のように木製が主流ではなかった。木製はまだ数も少なく、金額も結構割高だった」(S. 女)とあるが、事実、市場はその通りであった。しかし、調査対象には木製がかなり多く、スチール製と同割合存在する。ただし、この他に木目調というものもあるので当時出回り始めた木質・金属混合製品と区別がつかないものもある。

材質も含め、机の意匠についての子どもの思いは複雑である。前述したように、自分の机を喜ぶ子は多いのだが、それには、友達と一緒になのでお気に入り、というのもある。他の子が持っていなかったので自慢、というのもある。他方「クラスの子がくるくるメカ(高さ調節できるやつ)を買ってもらったと言って家に見に言った時、僕も欲しくなった」(K. 男)のように、友達の持っている机が羨ましかったというのものもちろんある。新奇さ、CM、そして友達の動向に子どもは幼い時から敏感なのである。「私はどこでそれ

を知ったのか思い出せないが、何故か、『ピンポンパン』の机が欲しいと言い張った。それを聞いた祖父が、それならと、ピンク色で机の表面にはうすい花もよりのついた『ピンポンパンデスク』を買ってくれた。」(T. 女)と孫に甘いお祖父ちゃんがいる、子どもの主張が通る例もある。しかし、机の選択にあたって、最終的な決定権は親の手にあるといえる。「私はピンクや水色などの色のついたスチール製のものを買ってくれるのだとばかり思っていたけど、実際は木の机だった。それの方が長持ちしてあきないだろう、ということだった。」(M. 女)「初めて机を見た時にがっかりした。なぜなら木の机で柄は木目だけだったし、ライトしかなくこれといって何もついていなかったからです。みんなはアニメの絵などがついていたので。」(K. 男)「親にデパートに連れていってもらった時はワクワクしていたのだが、結局、私の買ってもらったのは、木目調のシックな、大人が書斎で使うようなもので、座ると前にあるのは、かわいいキャラクターではなく天井にも届かんばかりの棚であり、置き場に困っていた学習百科事典全13冊が並べられたのだった。」(H. 男)当時の子どもの、無然とした面持ちが目につくようである。もっとも子どもの方も、欲しい机をT. 女のように言い張った様子もないのだが。大人は、子どもの淡い願いを無視して(?)、「将来大きくなってからも使用できるよう、キャラクターものではなく、どっしりとした当時としてもけっこう高価なもの」(O. 女)を購入する。実用性を重んじる堅実で慎重な態度がうかがえるのである。石油ショック後の社会的風潮と言えようか。あるいは、本学部学生(になるような)の家庭、という調査対象の特性もあるのかもしれない。

この堅実な選択は大抵の場合裏切られない。つまり、あまり気に入ってなかった机も「木製の良さがわかってきたのは高学年のころから。」(S. 女)「中学、高校と進学するにつれてこの机の良さがわかってきました。」(I. 男)、あるいは近所の子のにそろえたものの「今から思えば何故木製にしなかったんだろうとくやむことしきり」(K. 女)の人もある。子どもの価値観は成長発達につれて当然変わってくる⁵⁾。流行の変化もある。学習機のように長期間にわたって使用されることが予想される生活財については、計画性のある選択が望ましい。

(3) 学習機の使い方

ほぼ全員が学習機を保有しているが、それを当時どのように使っていたらうか。比較的よく使っていた、とするのは39人、対して殆ど使わなかったとするのは18人である。またそれぞれの男女比は17人対22人、14人対4人となる。調査対象が男子優勢であったことも加味して男子は使わなかった者が多い、女子のほうがよく使っていた、という傾向がわかる。

1) よく使うのは

「私はその机の上で宿題をしたり、本を読んだりした。宿題は、帰ってきたらすぐ片付ける約束だった。本は、みんながTVをみている間もずっと1人で読んでいたから、夜、例の電気スタンドをつけてだった。高校まで私はこの机で宿題をし、受験勉強をし、本を読み、ときに遊んできた。」(T. 女)「小さい時から、机に向かうことが好きだったので(勉強するしないにかかわらず)今でも、こたつより机でいろんなことをしています。」

(K. 女) などのように、机を使うのが習慣となり、身体の一部のようにしている人もいる。宿題をするのはもちろん、本を読む、手紙を書く、習い事の習字を書く、ハーモニカの練習をする、など多様な行為が行われている。もっとも、真面目に姿勢を正して机に向かっているばかりではあるまい。「(中央の)一番大きな引き出しには自分にとって大切なものと筆記用具が入っており、勉強中によくその中から遊び道具を出して、半分遊びながら宿題をやった。」(Y. 男) 宿題なんて、やらなきゃならないのはわかるけど、気乗りのしないものである。このような学習の機能以外に、「ほとんど、プラモデルを作るのに使ったりして、机の上のゴムシートは、カッターの跡とか塗料の跡で汚れていた。」(A. 男) のように、その頃流行っていたプラモデル製作の作業台だったという人も3人(いずれも男)いた。細かい部品を広げて作業するには好適なのであろう。また、机でなにかを食べるのは禁止されていた、という人も2人(いずれも女)いて、親の細かなしつけ態度がうかがえる。そのうちの1人は「だから、たまに日曜日のお昼ごはんにおにぎりを作ってくれたとき、そこで食べられるのはものすごくうれしかった。」と記している。特別に解禁になる時もあるのだろう、子どもらしい楽しみ方である。

2) 使わないのは

「その机で勉強することは全くなく、食卓で宿題を片付けていました。」(O. 女) 「いつも本を並べてあるだけで、そこで勉強をしたことはないのです。」(S. 男) のように、勉強を学習机でした記憶はあまり無く、食卓や居間のコタツでするのが習慣化していたというのである。(冬は足元が寒いので机を使わなくなった人もいる。) 「たしか、最初のころは何をするにでもなしに、ただ座っているだけで楽しかったような気がする」(M. 男) 机なのに、である。嬉しさのあまり机の回りを走り回ったT. 男も「入学した当初は、まじめに書き取りや、引算のドリルをやったが、しばらくすると、本格的な友達づきあいが始まり、机のことなんか、すっかり忘れてしまっていた。」という具合である。机は学用品などの置き場に過ぎない。「物置場と化して」との同一表現を何人もがしている。しかし、それはそれとして意味を持つのである。「一番上の引き出しは鍵がかけられるようになっていきます。そこには他の人には見られたくないものや、宝物をしまっていました。」(K. 女) 「(机は) もっぱら本棚もしくは宝箱であった。このころは少しでも気にいったものがあれば机にしまっていたので、引き出しの中はいつもごちゃごちゃしており、開かないことがあった。」(M. 男) と、引き出しはモノを入れる(隠す?) ものとして重宝されていたのである。そしてそのことは、次のような示唆に富んだ指摘へとつながってくる。「ただ教科書やノートや、その他いろいろなものを置いておくための場所であったように思う。しかし、その机のある場所は狭いながらも自分だけの空間として存在しており、その空間は自分にとって生活の起点であったように思われる。」(K. 男)

3) そのうちに使われる?

大人がおそらく期待したであろうようには使われることの少なかった机も、子どもの成長発達につれ、学習机本来の機能を発揮することとなる。「その机は中学校ぐらいから使いたし、今も使っている。小学校の時はたいして勉強しなかったのだから、机は必要なかったのではないかと思う。」(K. 女) 「本格的に使い出したのは、中学以降で、高校そして

おまけの1年と、お世話になった」(S. 男)「高校3年生のときは、この机と結婚したようなものだった。勉強がうまくいかず、くじけそうな時も陰から僕を支えてくれた。机は僕の宝物の一つ。」(T. 男)などと6人が述べている。実際にはもっと多いような気がする。小学校高学年から中学生になった時が転換の目安と言えよう。

反面、「小学校の間は、ずっとその机の上で勉強をやっていたが、中学校に入るとこたつやテーブルの上ですることが多くなり、だんだん使わなくなってきた。」(N. 男)「高校生になった頃から机にきっちり座る習慣がうすれ、コタツで勉強する習慣がついてしまいました。」(O. 女)などのように、机から離れていく例も見られる。それは、「冬になるとこの机は足もとが寒くなるので、高学年のころはこたつで勉強するようになって」(A. 女)と述べているように、学年が進むと夜間の勉強が増え、立ち机では暖房も十分でないため机離れが起こることもあるだろう。しかしO. 女は続けて「受験時代、机に座ると勉強しようという気持ちになるために、無理に座ろうとしました。」とも言っている。

また、大きくなっても殆ど机では勉強しないままだった、と述べる人もいない訳ではない。「勉強机で勉強した記憶はあまりない。中学以降はしたこともない。」(O. 男)「小学生の時から今まで、殆ど机の上で勉強していなかったのを見た目はきれいですが、(中略)15年くらい私の部屋にあります。」(U. 男)「そこで勉強したことはないのです。いつも居間のおぜんやコタツでしていました。今でも同じです。何だか両親に申し訳ない気がします。」(S. 男)机も泣いているのではなからうか。

以上の使い方の経過をまとめると、図1のようになる。

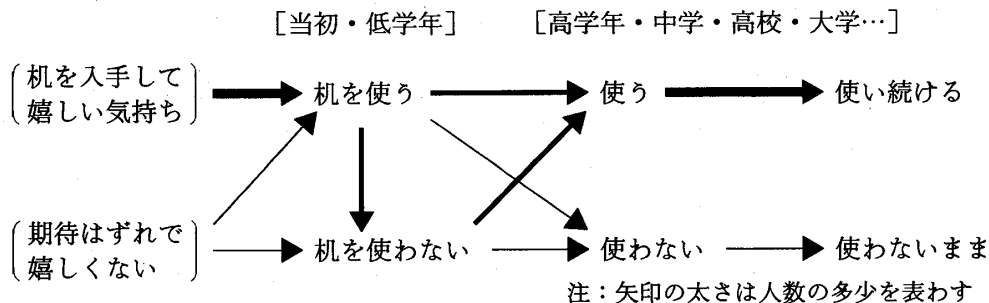


図1 学習機の使い方変遷

(4) 学習機の管理

1) 学習機の整理整頓について

次に、学習機を日頃どのように扱っていたか、とくに整理整頓の状態はどうであったか、を見てみたい。表1に示したように、散らかっていた、と明言するのは26人に対して、きちんと片付いていた、は11人である。この他、散らかっていたかどうかははっきりしないが、物を置いておきだけ、あるいはきちんとしていたとは書かれていないが、よく使った、が各々7人ずつ見られる。これらも含めて推測すれば、小学生の学習機は整頓されない状態が多かったこと、女子の方が比較的整理整頓を行っていること、とは言え女子だから整理整頓を怠らないというものでもないこと、などがわかる。以下は子ども自身の学習機

管理行動の諸相である。

「その机は本当に大事に使ったし、時々みがいたりして、今でも実家の私の部屋でピカピカしている。」(S. 女)「こまめに、そうじの時などは、ほこりがたまりやすいところをみがいたりしていたので、(中略)まだまだ現役ばりばりでいけるでしょう。」(F. 男)「私は汚くしていると落ち着かなくてイライラするので、よく引き出しの中身や机の上の置物など入れかえたり並べかえたりして、整理整頓はちゃんとできていました。」(K. 女)このように、机を丁寧に扱い、その掃除や片付けが生活習慣として確立していたことを示す例もある。

「何カ月にも一回か、引き出しの中を整理するんですが、その時、いらぬものやがらくたがたくさん出てきて整理するのにすごく時間がかかりました。」(S. 女)普段はあまり片付けてない分、年末や夏休み、新学期などにまとめて整理をするのが年中行事のようになっていた例が9人(うち女7人)いる。

「引き出しは4つあり、横に広いところには文房具や財布などの貴重品(小学生の)などを入れ、あとの3つは1番上には文房具、2番目はテストやプリントなどを入れ、3番目の大きな引き出しにはおもちゃを入れていた。」(M. 男)というように引き出しを仕分けして割合きれいに使っていた、と9人(うち男7人)が記していた。もっとも整理をして入れようとしてもすぐに「ごちゃごちゃ」になっていた、と記した人はそれ以上いる。

また、鍵つきの引き出しの使い方では、「そこには誰にも見せない宝物(きれいな折り紙とかシールとか日記とかも)隠してました。」(M. 女)「自分のおこずかいやおこずかい帳、その他大切と思う物を入れていました。そして鍵を必ずかけていました。」(S. 女)というように、他の人に見られたくない物や大事な物を入れていて、なかなか用心深い。該当者6人が全員女子であるのも興味深い。これとは別に、鍵を親に取り上げられていて使えなかった、という人(男2人)もいた。隠し事の排斥という意図か、施錠したまま鍵を失われるとまずいということか、親の方も用心深い。

先にも述べたように学習机は、子ども自身の持物の置き場としての性格が強いので、次のような例もある。「学習のために使うことよりも、机のすみに小物を置いたり、引き出しに入れる物を増やしたり、収納としての機能を楽しんでいたような気がします。おそろいの(机を買った)さなえちゃんの家遊びに言った時、さなえちゃんの机の物の置き方をまねしてみたりしました。」(T. 女)学習机で“物の片付け方”を学んだというのである。

子どもの身の回りの整理整頓の自己管理については、家庭でも学校でも問題となる場所である。整理整頓という基本的な生活習慣が未確立であると、安全・衛生の見地だけでなく、忘れ物や探し物の多さに関連してくるので、親も教師も頭を悩ますのである。整理整頓は小学校家庭科の教材としても取り上げられている。

「買ってもらってすぐはきれいにしていたが、数週間もすると、机の上に本やかばんを山のように積み上げていた。」(I. 女)「引き出しの中には、プラカラーや色鉛筆、ハーモニカ、学研の教材、トランプ、そろばん、ふえ、etc., 本棚にはプラモデルや使ったことのない参考書、机の上には鉛筆削り機やセロテープのカッター、教科書ノート、その他わけのわからないものが山積みになっていた。」(O. 男)この「山のように、山積み」という語は他に数人が使用している。「それにしても引き出しの中はいつもごちゃごちゃ

と散らかっていたなあと思う。時々、母親に怒られて整理したのだけれど、一週間もすると、鉛筆やらビー玉やらメンコやらで、ごった返しの状態になった。」(K. 男) 親から叱られたことも数人が記している。「あの頃は、とにかく整理が下手で、机の中に入れたものは、迷路に迷いこんだかのごとくどこへ行ったか分からなくなり、母親に“もの探し”を手伝ってもらったように思う。自分自身の感じとしては、いくら片付けてもどこからともなくものが“わいてくる”かのごとく、散らかってしまうようだった。」(U. 男) と述べているように、この時期はモノ(生活財)との関係が混沌として無自覚的であったのだろう。整理整頓のやり方以前の問題なのである。そのような中で、次のような例が目された。「小学生だとプリント類が多いので、初めは、きれいにとじて本棚に方付けていたが、だんだん入りきらなくなって最後には、親に見せると即ゴミ箱行きが多かった。」(K. 男) とにかく、プリント類に限らず、モノが多いのである。その多さは、親の子ども時代と比較にならないのは確実である。それも欲して手に入れたというよりは、自覚しない間に手にあった、というようなモノが多いのである。多すぎるモノをなんとかすることのほうが片付け方を教えるよりも先決なのかも知れない。

前述のように「机の散らかりを親に叱られた」と書いているのは数人にすぎないが、実際にはもっともっとあるだろうし、叱られてもその実感のないほどの日常的な親の小言繰り言でしかなく、聞き流すばかりだったということだろう。子どもが自覚して身の回りを整理整頓できるようになるには、時期を待たなければならないのかも知れない。(U. 男は「満足に整理が出来るようになったのはかなり遅く、確か小学校高学年の終わりだった」と言っている。) 見た目がきれいでもなくとも、モノの置き方に自分なりの整序ができればよい訳だが、そのようになるにはモノとモノ、自分とモノとの関係が客観的につかめることが必要であろう。そして、そのような能力は、主体的に学習機を使いこなしていく過程で醸成されていくものと考えられる。

2) 学習機の装飾について

机を飾ることの欲求は子どもにもあるはずである。意匠のところでも見たが、正面の本棚を飾っているプレートやデスクマットのキャラクターは、子どもの心を大いにとらえている。バンビだの、スーパーカーだの、ピンポンパンだの、キキララだの、それらはいずれも、メーカーの側にとっても重要なセールス・ポイントの一つになっている⁶⁾。しかし、それらは机に付属し、或は当初から買い揃えられるものであって、子ども自身が飾るものではない。子どもがしている装飾とは、おみやげで貰った人形や自作のプラモデルを棚に飾る、デスクマットの下にきれいなカードをはさむ、などである。「(机への)愛着が増すと、机はどんどんシール、キーホルダー、自分で画いた絵によって装飾されていく。」(K. 女) とくに目立つのはシールを貼ることである(13人)。「昔からシールをはることが好きで、その机の至るところシールだらけだった。」(E. 男) というものから、「私は机の上にシールをベタベタ貼ったりするのはあまり好きではなかったので、横に2, 3枚貼っていました。」(M. 男) まで、とにかくシールの魅力は相当大きかったようである。「机にシールとか貼ったらだめだと母に言われていたけど、ある時ついに耐えきれなくなってピンクレディーやドラえもんのシールを貼ってしまい、それらは今も残っています。」(N. 女) もある。シールはお菓子や雑誌の付録にふんだんについており、裏紙

を外せばすぐに貼れる容易さがうけるのであろう。学習机にペタッと貼ることで、画一性に抗して個の主張を行い、自己のテリトリーを表現するものと推測される。このように子どもにとっては、深遠な意味を持つものであっても、大人には落書きの一種でしかなく、排斥されるのである。その証拠に「シールをベタベタ貼って、大きくなってからは友達が来ると机を見られるのが恥ずかしかった思い出がある。」(N. 男)とある。シールではないが、「(キャラクターの)写真は取り外しができるので、小学校も3, 4年くらいになると裏返して白い面を前にしていました。」(K. 女)というのものもある。

(5) 学習機の保有期間と処分

これについて明記している人のなかでは、現役で使用中が23人(学習用には使用していないが残存も含めると28人)と多く、大学で下宿をしたので実家に置いているが10人(高校卒業まで使用も含めると15人)となっている。また途中で買い替えや交換をした人は8人見られる。

「『6. 3. 3で12年』といったCMなどをよく聞きましたが、うちのはもう14年目で、まあ、よくもっているのでは、と思います。」(S. 男)というように、確かに保有期間は長い。経済性から考えても当然のことであろう。長期使用するには、身長伸びに応じた高さ調節が可能なが要件となろう。加えて、本棚を分離して平机に変更できるとベターである。「元のままでは、中学生になって、とても恥ずかしかったので、取れる装備は取れるだけ外して、シンプルにして使っている。」(H. 男)というのがあるからである。また、途中で買い替えなどした8人の机は大半がスチール製もしくは中古品である。意匠の項で見たように、木製の実用的な学習機の購入が目立っていたが、そのときの「将来も使えるように」との親の意図はここでも的中したと言えようか。さらに下宿生は実家に置いている例が目立つことから、下宿生活における机の実態にも関心が及ぶが、ここではふれない。このほか、思い出のある机なので自分の子どもにもつかわせたい、としている例(男2人)が見られることにも注目しておきたい。

さて、以上のように学習机は、小学生時代からそのまま保有され続けており、処分の例は16人と多いほうではない。処分の方法は、他の人に譲った、が6人、粗大ごみに捨てた、が3人、電話台に転用が1人、がわかっているところである。譲った6人の行き先は弟、いとこ、近所の子、親、などである。

「私の部屋には、もう一つ中学生の時に買ってもらった事務用の机があるので、私は今そこで勉強をしている。部屋に二つも机があると邪魔なので、今年の夏捨てることにした。捨てる時、たいへん悲しかった。」(K. 男)最初の机が使いづらくなって二つめを買ったけれど、古い方を捨てるに捨てられない。何年間も置いたまま、ようやく決心したけれど、しのびなかった、という心境である。「いらなくなった古いテーブルが、私の机でした。その机の上には、父が作ってくれた本立を置き、飾り気のない机でした。でも私はその机が好きで、姉からお店に売ってある、かっこいい机を譲ってもらうまで、ずっとその机を使い、新しい机に変える時、とても寂しい気持ちをしたことを覚えています。」

(O. 女)というのものもある。長い間使った机には愛着があり、高価であるとか高級であるとかには関わりなく、離れがたい気持ちが湧くのであろう。また「今は、その机はありませんが、思い出してなつかしかったです。」(K. 男)「今考えると妙になつかしい気が

します。」(N. 男)「今もあの机は元気だろうか……。」(S. 男)などでレポートが結ばれている例にも考えさせられるものがある。

5. 結 語

以上みてきたことをまとめると、子どもにとって学習機は家庭生活の拠点である、ということに尽きる。学習機は、勉強の場としてだけでなく、遊びや読書や物づくりや思索の場であり、持物の置き場であり大事な物の隠し場なのである。子どもの心身の成長の過程で、あるいは性差や個性によって、その使用実態の変化や差異は現れても、子どもの空間の象徴としての意味は共通している。学習機は、子どもに受けそうなものよりも長期使用できるよう、少々高価でも木製で実用的なものを与える例が目立っていたが、親のこの堅実さはそれはそれとして評価される。しかし、たとえどんな机であろうと、また新調であろうが中古であろうが、子どもにとっては、自分の場が確保されるということには変わりなく、だからこそ長期間、居場所であり続けた机への愛着心はひとしおなのである。

生活・生活科教育法のレポートを使用させていただきました、42期・I文・II文理実・III文の受講生の皆さんに感謝します。

註

- 1) 菊沢康子「家庭用学習機・椅子の体位への適合」家政学雑誌Vol.34 No.8 (1983)
- 2) 日本家庭科教育学会『現代の子どもたちは家庭生活で何ができるか』家政教育社 (1985)
- 3) 外山知徳『現代のエスプリ・子ども部屋』至文堂 (1985), 拙稿「子どもの家事参加について」和歌山大学教育学部紀要 (教育科学), 第39集 (1990) など。
- 4) 仙田 満「子どもとあそび」岩波新書, 86-89 (1992)
- 5) 前掲書2) 113-120
- 6) (株)くろがね工作所『空間創造』同社, 164 (1987), 他にコクヨ株式会社からカタログ資料の提供をうけた。